



連載インタビュー『沖繩を語ろう』の記念すべき第1回は、ジャーナリストの野里洋さんがゲストです。野里さんは、本土復帰前の1969年から琉球新報社の記者として活躍。退職後は、フリージャーナリストとして『癒しの島、沖繩の真実』『沖繩力の時代』(ソフトバンク新書)を刊行し、県内書店のベストセラーランキング入りが続いています。在沖40年のベテラン・ジャーナリストに対してインタビューにのぞんだのは、同社で後輩記者だった在沖27年の鈴木孝史・広報委員会委員です。

——2冊の新書を刊行した経緯を。反響はいかがですか？

野里 沖繩で生活を始めてから、今年でちょうど年になります。これまで自分のことをあまり語ってきませんでした。年を過ぎたあたりから、書くべきではないかと思うようになりまして。自分のことについても、わたしがずっと取り組んできたのは沖繩問題でしたので、そのまま、両著のような内容になりました。スタンスとしては、本土で生まれた人間だけれども、ウチナンチュになっていくつもりで書きました。ウチナー、ヤマトの両方から

見た沖繩を冷静に書けたと思っと思っています。沖繩の問題点もかなり指摘しましたので、お叱りをだいぶ受けるのではないかと覚悟していたのですが、批判の声は全くなく、「もっと書いてよかったんじゃないか」という意見さえありました。2冊とも、反響は予想以上に大きく、驚いています。長い期間、県内のベストセラーランキングに入り、『癒しの島、沖繩の真実』は2刷が決まりました。同著は、ウチナンチュにとつて忘れかけていることもたくさん記しました。2冊とも、県外から来た人々には沖繩入門書とし

て好評のようで、一人で何冊も購入して本土へ送っている人もいると聞いています。

——いまもおっしゃいましたが、『沖繩力の時代』の「はじめに」は、「私は、自分ではウチナンチュになつたと思つている」という書き出しですね。野里さんをウチナンチュにしたのは何だったのですか？

野里 運命としか、言いようがないですね。わたしは石川県金沢市で生まれ育つたのですが、かの地は沖繩と縁が深くありません。『癒しの島

』でも触れたとおり、子供のときに、映画「戦艦大和」を観て、「大和は沖繩を助けに行ったのに、着く前に沈められてしまった。その後、沖繩はどうなったのか。激戦で沖繩の人々がたくさん死に、その後、日本から分断されて、アメリカへ渡されてしまった。こういうことを放つておいてよいのか？」と、子供心に素朴な疑問を抱いたのです。ですから、どうしても、沖繩を直に見たかった。大学1年生のときに初めて訪れ、戦争が終わつて間もないころの雰囲気に触れました。このとき、ほとんど自分の進路が決まりました。

——その傾向ですが、わたしの実感では、ここ20年以内のことだと思ふのですが……

野里 経済的な力がついてきて、本土から注目されるようになり、ある時期から、若者も年配者も「沖繩はいいよ！」と胸を張るようになりましてね。わたしが沖繩に関わるようになったころは、サンシンを持つて本土へ行くのは「恥ずかしい」という気分を大半のウチナンチュが持つていました。本土在住者には、「サンシンを押し入れのなかで弾いた」などというエピソードもありました。しかし、いまは、全くひっくり返つて、どこでもサンシンの音が聞こえ、ヤマトンチュも巻き込まれています。その一例が、先日「新宿エイサーまつり」ですよ。日本を代表する大繁華街が、遠隔地の沖繩の伝統文化を使って「まちおこし」をしているのですから……まさに、隔世の感です。

——ところで、沖繩の世帯数が激増

している。わたしが沖繩で暮らし始めた年は30万世帯でしたが、いまや52万世帯。大家族が核家族化しています。連動するように、男性の平均寿命は「長寿県」とは言えなくなり、肥満率全国一という見出しも新聞に踊るようになりました。一家に一人オバアがいなくなり、「沖繩力」は今後もキープできるでしょうか？

野里 良いかたちで「沖繩力」を伸ばしていけるかどうかは、ウチナンチュ自身に関わつているとしか言えません。しかし、わたしは、維持できると見ています。県民所得や完全失業率、経済力などは数値で表して比較できますが、模合による助け合いをはじめ、ヨコ社会の魅力は数値に出て来ません。サンシンの保有率もデータがありません。県民所得が低くても、毎晩のようにサンシンを弾いてい

ます。経済力が劣るからといって、そのまま暮らしが劣つていくかどうかは、はなはだ疑問です。スローテ

ンポな地域社会のなかで助け合つて暮らす沖繩の暮らしに魅せられ、「移住者」も増えていきます。沖繩の良さを、ウチナン

——ところで、沖繩の世帯数が激増している。わたしが沖繩で暮らし始めた年は30万世帯でしたが、いまや52万世帯。大家族が核家族化しています。連動するように、男性の平均寿命は「長寿県」とは言えなくなり、肥満率全国一という見出しも新聞に踊るようになりました。一家に一人オバアがいなくなり、「沖繩力」は今後もキープできるでしょうか？

——でも触れたとおり、子供のときに、映画「戦艦大和」を観て、「大和は沖繩を助けに行ったのに、着く前に沈められてしまった。その後、沖繩はどうなったのか。激戦で沖繩の人々がたくさん死に、その後、日本から分断されて、アメリカへ渡されてしまった。こういうことを放つておいてよいのか？」と、子供心に素朴な疑問を抱いたのです。ですから、どうしても、沖繩を直に見たかった。大学1年生のときに初めて訪れ、戦争が終わつて間もないころの雰囲気に触れました。このとき、ほとんど自分の進路が決まりました。

——その傾向ですが、わたしの実感では、ここ20年以内のことだと思ふのですが……

野里 経済的な力がついてきて、本土から注目されるようになり、ある時期から、若者も年配者も「沖繩はいいよ！」と胸を張るようになりましてね。わたしが沖繩に関わるようになったころは、サンシンを持つて本土へ行くのは「恥ずかしい」という気分を大半のウチナンチュが持つていました。本土在住者には、「サンシンを押し入れのなかで弾いた」などというエピソードもありました。しかし、いまは、全くひっくり返つて、どこでもサンシンの音が聞こえ、ヤマトンチュも巻き込まれています。その一例が、先日「新宿エイサーまつり」ですよ。日本を代表する大繁華街が、遠隔地の沖繩の伝統文化を使って「まちおこし」をしているのですから……まさに、隔世の感です。

——ところで、沖繩の世帯数が激増している。わたしが沖繩で暮らし始めた年は30万世帯でしたが、いまや52万世帯。大家族が核家族化しています。連動するように、男性の平均寿命は「長寿県」とは言えなくなり、肥満率全国一という見出しも新聞に踊るようになりました。一家に一人オバアがいなくなり、「沖繩力」は今後もキープできるでしょうか？

野里 良いかたちで「沖繩力」を伸ばしていけるかどうかは、ウチナンチュ自身に関わつているとしか言えません。しかし、わたしは、維持できると見ています。県民所得や完全失業率、経済力などは数値で表して比較できますが、模合による助け合いをはじめ、ヨコ社会の魅力は数値に出て来ません。サンシンの保有率もデータがありません。県民所得が低くても、毎晩のようにサンシンを弾いてい

ます。経済力が劣るからといって、そのまま暮らしが劣つていくかどうかは、はなはだ疑問です。スローテ

やさしく、しなやかな「沖繩力」に魅せられて

～ジャーナリスト・野里洋さんに聞く

チュが自信を持つて整理し、残していくのであればやさしく、おおらかな、しなやかな「沖繩力」はまだ大丈夫だと思えますね。本土は、大人も子供もゴムが伸びきった状態で、余裕がありません。その点、沖繩は、原石の力が残っています。甲子園大会で、八重山商工や宜野座高校が、地元の子供たちだけで、全国各地から優秀な選手や監督を集めたチームに善戦し、勝つています。勉強でもスポーツでも、指導者や親たちが原石を磨く環境をしっかりと整えてやれば、芸能界や女子ゴルフ界の前列を振り返るまでもなく、若いウチナンチュたちが、おおいに「沖繩力」を発揮してくれると思いますよ。

(聞き手・鈴木孝史広報委員会委員、編集室タッカーハウス代表取締役)

Profile

野里 洋 (のぎと・よう)

1942年石川県金沢市生まれ。法政大学法学部卒業。67年、琉球新報社入社。東京総局勤務後、69年に米軍統治下の沖繩の本社へ転属。政経部、社会部、文化部記者。文化部長、社会部長、編集局次長、東京支社長、取締役役員論説委員長、常務、専務を歴任後、2006年6月に退社。現在は沖国大非常勤講師を務める。

著書
『癒しの島、沖繩の真実』
『沖繩力の時代』(ソフトバンク新書)

